

孝標女と物語

——姉、継母との関係を中心に——

伊 藤 守 幸

『更級日記』執筆時の孝標女の正確な年齢を知ることにはできないが、少なくとも見積もっても五十余年に及ぶ人生の記録として、この『日記』の内包する時間は、王朝女流日記作品の中でも長大なものと言うことができる（実質的には四十年余りの出来事が記されているわけだが）。しかも、その短からぬ人生は、僅かに『紫式部日記』や『和泉式部日記』と同程度の分量の記事によって描かれており、それらの日記に内包される時間が実質数ヶ月程度に過ぎないことを考え合わせれば、『更級日記』のような作品の成立にあたっては、記されるべき記事の選択は、当然慎重に行われたことが想像されるのである。そして、ここでもうひとつ興味深い事実として注目されるのは、そのように素材の厳選を経て成立したはずの『更級日記』が、記事内容という面から見た場合、相当多岐にわたる出来事を内包しているという事実である。主題的統一性という観点に立てば、たとえば『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』と、『更級日記』との対照性は、一目瞭然である。そして、言うまでもないことながら、記事の量的な簡潔性と記

事内容の多様性とは、本来なら相反する方向性を有するはずの事柄である。現在我々の目にする『更級日記』の構造は決して単純なものとは言えないが（それどころか、複雑な構造的多層性すら看取される）、そうした作品構造が要請されることになった理由のひとつとして、簡潔な記述の中に人生の諸相をできるだけ多面的に取り込もうとする困難な作業の存在を想定したとしても、あながち的外れということもあるまい。¹⁾

さて、そのように作品構造という面だけから見ても、『更級日記』はなかなか一筋縄で捉えられるような作品ではないわけだが、それではこの『日記』が、作品的結構を整えるための配慮をまったく閑却しているのかと言えば、もちろんそんなことはない。執筆時の立場からなされる述懐という最も簡明な方法によって、作者は『日記』を一定の方向性のもとに統括するべく、繰り返し試みているのである。そして、自己の人生行路を捉え返そうとする彼女の内省的意識にとつて、最も大きな問題となるのが、物語の存在だったのである。そのことは、作中に記された様々な述懐を通じて、繰り返し明示されている。何よりこの『日記』は、物語を求めて旅立つ少女の姿から書き起こされているのである。

あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間宵居などに、姉継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままにそらにいかでかおぼえ語らむ、いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。²⁾

菅原孝標が上総介に任ぜられたのは寛仁元年（一〇一七年）のことであり、このとき孝標女は十歳であった。道真の嫡流という学問の家に生まれ合わせた娘が、都での十年間、まったく物語に触れることがなかったとは考えにくいし、³⁾また、「姉継母などやうの人々」が、任地でのつれづれの慰めに幾つかの物語を携えていたとしても不思議はないのであるが、『日記』はそうした事情についてはいっさい触れることをしない。しかし、右の文章を見れば、自分はずなげ物語に憑かれてしまったのかという問いが、孝標女にとって自己の起源を問うに等しい重大事であったことはよく分かる。「いかに思ひはじめけることにか」という一句は、いかにもさりげない眩きのように書かれてはいるものの、自叙の冒頭、人生の始発の光景を描くにあたって、まずこのような自問の言葉から始めなければならなかったことの意味を見過ごすわけにはいかないし、また、『更級日記』の総体としてのありようを見れば、それが生涯を通じて繰り返し問い直されるべき問題であったことも明らかである。そして、右の記事は、そうした問いに対する最も根源的な次元での解答と言えるかどうかは別としても、少なくとも彼女が物語への思いを募らせる重要な契機となった出来事の説明としては、簡潔明瞭にして間然するところのない文章である。ここでは上総での日々は、物語からの疎外状況として定位されている。そして、「思ふままに」物語に触れられないという状況にあつて、「姉継母などやうの人々」を通じて得られる断片的な情報、物語ゆかしさを一層募らせ、あたかも引きしぼられた矢が放たれるように、彼女は都（＝物語）へ向けて旅立つことになるというわけである。

ここに登場する「姉継母などやうの人々」が、作者を物語の世界へいざなう媒介者としての役割を果たしていることは明らかである。「などやうの人々」の中には、あるいは乳母や女房達も（さらには兄も）含まれるかもしれないが、それらの人々については、この文脈において特に問題とされることはない。それに対し「姉継母」と名指しされているふたりについては、上落後の記事の中でも繰り返し言及がなされており、作者との交流の深さが窺わ

れるのである。そこで、本稿では、この「姉継母」と作者との間に形成されていたはずの、物語を軸とする交流の内実について、以下、具体的に考察を進めて行くことにする。

二

まず「継母」についてであるが、彼女に関して藤原定家は、「上総大輔後拾遺作者中宮大進從五上高階成行女孝標朝臣為上総時為妻仍号上総」という注を付している。これによれば、この継母が中宮大進高階成行の娘であり、孝標の妻として上総にあつたことから「上総大輔」と呼ばれていたこと、『後拾遺集』にも入集（一首入集）する歌人であつたことなどが知られる。

孝標に伴われて上総へ下つたのが作者の実母ではなく継母であつたという点については、このとき孝標の北の方としての位置を占めていたのが、この継母だつたからだという指摘がある。⁴⁾平安時代の「継母」という呼称に関する調査に基づいた、興味深い指摘である。また、高階家の家系についての調査もすでに行われており、この一族が和歌、漢学にかかわる人材を輩出していることが知られている。なかでも注目すべき事柄として、継母の叔父にあたる高階成章が、紫式部の娘の大式三位を妻としているという事実があり、「上総大輔にとつては叔母にあたる大式三位の存在は、『源氏物語』をはじめ、物語を入手するのに都合なことが多かったのではないか」という指摘もなされている。⁵⁾孝標女を物語の世界へと導く重要な役割を継母が果たしていたことを思えば、紫式部の娘が、義理の仲とはいえその継母の叔母にあたる関係であつたとは、まことに奇しき因縁とでも言うはかない事実ではあるが、ただし、継母の叔母としての大式三位と、孝標女の『源氏物語』入手との間に、何か関係があつたかのような

議論には問題がある。孝標女が『源氏物語』の「五十余巻」を「をばなる人」から入手したのは、治安元年（一一〇二年、作者十四歳）のことである。この「をばなる人」とは何者かという問題は、『更級日記』に秘められた魅力的な謎のひとつであるが、今のところそれを知る手立てはない。したがって「をばなる人」と大式三位との関係も知りようはない。しかし、いずれにしても大式三位が高階成章と再婚したのは、これより十数年後の長元、長暦年間のことと考えられるから、少女時代の孝標女と大式三位との間には、継母との縁戚関係を仲立ちにした結びつきなど存在するはずもなかったのである。因みに大式三位という一般的な呼称にしても、夫成章が大宰大式に任ぜられたことに由来しており、孝標女の少女時代には、当然のことながらそんな呼び名も存在せず、その当時、紫式部の娘賢子は、祖父為時の官名から「越後の弁」と呼ばれることが多かったのである。なお、継母との縁戚という点を別にしても、大式三位と孝標女の間については他に考えてみたい問題もあるが、今は省略に従うこととする。

さて、継母上総大輔について、外部的資料から確認されるのはおおよそ以上のような事柄である。次に、継母に関する作中の記述について具体的にみて行くことにしたい。

上洛後の記事に継母が登場するのは、都合三ヶ所である。最初は上洛の直後、孝標と離別することになった継母が家を去る場面。次に、それから四年後の万寿元年（一一〇二四年）の記事として、姉の死を悼む和歌の贈答が記され、さらにその二、三年後のことと思われるが（正確な年次は不明）、継母の「上総」名乗りに対する抗議の歌を、作者が父に代わって詠み贈ったことが語られている。

まず上洛直後の場面であるが、これは継母に関する記事として分量的にも最もまとまったものであり、そこにはいろいろと興味深い問題が隠されているようである。

継母なりし人は、宮仕へせしが下りしなれば、思ひしにあらぬことどもなどありて、世の中うらめしげにて、

外ほかにわたるとして、五つばかりなる児こどもなどとして、「あはれなりつる心のほどなむ、忘れむ世あるまじき」など言ひて、梅の木の、つま近くていと大きなるを、「これが花の咲かむをりは来むよ」と言ひおきてわたりぬるを、心のうちに恋しくあはれなりと思ひつつ、しのびねをのみ泣きて、その年もかへりぬ。いつしか梅咲かなむ、来むとありしを、さやあると、目をかけて待ちわたるに、花もみな咲きぬれど、音もせず。思ひわびて、花を折りてやる。

頼めしをなほや待つべき霜枯れし梅をも春は忘れざりけり

と言ひやりたれば、あはれなることも書きて、

なほ頼め梅のたち枝は契りおかぬ思ひのほかの人も訪ふなり

この記事から明らかになる事實は二点ある。ひとつは、継母が宮仕えの経験者であったこと。もうひとつは、「五つばかりなる児ども」という記述からして、継母と孝標との結婚生活が、少なくとも六年以上に及んでいたことである。さらにこの時の継母の心事を忖度しながら読み解いてみれば、上総での四年間の生活を通じて「思ひしにあらぬことども」があり、そのため「世の中うらめしげにて、外にわたる」というような実情であったとすれば、この離別はかなり深刻で決定的な事態だったはずである。それにもかかわらず「これが花の咲かむをりは来むよ」などと口にしたのは、自分を慕ってくれる年若い継娘を、余り悲しませたくはないという配慮から出たことであり、この言葉にそれ以上の意味はなかったに違いない。それ故、「なほや待つべき」という作者からの問いかけに対しても、「思ひのほかの人も訪ふなり」という婉曲な形ながら、結局、自分は訪うことはできないと告げるしかなかつたのである。これを孝標女の側から見れば、彼女が継母の一言を本気で頼みにして待ったのは、「うらめしげ」な「世の中」というものについて、まだ深くは理解の及ばない幼さを示すものとも取れるかもしれないが、同時に

そのような態度こそ、継母をして「あはれなりつる心のほど」と言わしめた彼女の心根を、何よりも雄弁に物語っているのである。

ところで、右に確認した事実、とりわけ「宮仕へせしが下りしなれば」という一句をめぐっては、なお考えるべき問題が残されているようである。というのも、少女時代の孝標女の胸中には、物語への憧憬とも重なりつつ、宮仕へに対する憧憬もまた、相当の一貫性をもって存在し続けたことが明らかだからである。たとえば、治安元年、『源氏物語』耽読と同じ年に彼女はひとつの夢を見ている。その夢の中で、ある人から「天照御神を念じませ」と告げられるのであるが、この夢について、彼女は晩年、夫の急逝を記した後の悔恨の述懐の中で、次のように語っているのである。

年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど後の御かけにかくるべきさまをのみ、夢解きもあはせしかども、そのことは一つ叶はでやみぬ。

治安元年にこの夢を見た際の記述は、「人にも語らず、なにとも思はでやみぬる、いと云ふかひなし」と結ばれているが、晩年の述懐を見れば、作者がこの夢に深い関心を寄せ、夢合わせまで行っていたことは明らかである。しかも「夢解き」は、この夢について、貴人の乳母として「みかど后」の庇護を受ける様だと解き合わせていたのである。こうした乳母としての宮仕へについては、たとえば『枕草子』でも「位こそは……」の段において、女の位の最初の例として挙げられており、宮仕への中でも別格に位置づけられるものだったことが知られる（ただし『枕草子』では「女こそ、なほわるけれ」という文脈で語られているのだが）。

さらにもう一例を挙げておくと、作者二十代後半のことになるが、その頃作者に代わって長谷寺に参籠した僧の得た夢告は、奉納した鏡に明暗二相の影が映し出されるというものであった。そのうち明るい方の影については、

次のように記されている。

いま片つ方にうつれる影を見せたまへば、御簾ども青やかに、几帳押し出でたる下より、いろいろの衣こぼれ出で、梅桜咲きたるに、鶯、木づたひ鳴きたるを見せて、「これを見るはうれしな」とのたまふ……

あたかも華やかな宮廷生活を髣髴とさせるような映像である。空白部分の多い二十代の記事の中に、この鏡の夢が記しとどめられていることの意味については、以前にも論じたことがあるが、「天照御神」信仰にかかわる記事が繰り返して登場することとも相俟って、少女時代から二十代を通じて、宮仕えに対する願望が作者の胸底に存在したことは間違いないと思われる。そして、その場合、「源氏物語」をはじめとする多くの物語（それらはしばしば宮中を主要な舞台とする）が、そうした宮仕え願望の形成に影響を与えたであろうことは疑えないが、より現実的には、宮仕え経験者である継母の影響力というものも無視できないのではあるまいか。「宮仕へせしが下りしなれば、思ひしにあらぬことどもなどありて」という記述は、継母と孝標の不仲の原因についての作者なりの解釈を示しているとも見られるわけだが、それが実情を正しく伝えるものだとすれば、「思ひしにあらぬ」上総暮らしを嘆く継母は、当然のことながら宮仕え時代を回想することも多かったであろうし、その思い出を継娘達に語る機会もあつたはずである。そして、継母の口を通して聞かされる宮仕え生活は、上総の鄙びた暮らしとの対照もあつて、孝標女には一入輝かしく感じられたに違いない。宮廷社会に対する彼女の幻想がそんな風にして育まれたとすれば、孝標女にとって継母の存在は、単なる物語世界への案内者という以上に大きな意味があつたと言わなければなるまい。

なお、宮仕え後の結婚が幻滅に終わるといふ継母の経験は、孝標女自身のその後の体験と酷似しており（離別まで至るか否かという違いはあるが）、そのことの意味も見過ごすわけにはいかない。自身の結婚について、孝標

女は余り明示的な書き方はしていないが、それが宮仕えの中断という形でもたらされたものであることは明らかである。次の記事が、それである。

かう立ち出でぬとならば、さても宮仕への方にもたち馴れ、世にまぎれたるも、ねぢけがましきおぼえもなきほどは、おのづから人のやうにもおぼしめてなさせたまふやうもあらまし、親たちも、いと心得ず、ほどもなく籠め据ゑつ。さりとして、その有様の、たちまちにきらきらしき勢ひなどあんべいやうもなく、いとよしなかりけるすずろ心にて、ことのほかにたがひぬる有様なりかし。

幾千たび水の田芹を摘みしかは思ひしことをつゆもかなはぬ

とばかりひとりごたれてやみぬ。

「思ひしことをつゆもかなはぬ」とは、余りに苦い独詠であるが、ここで彼女の言う「思ひしこと」の中に、結婚に対する幻想とともに、少女期以来の宮仕えに対する願望も含まれていたであろうことは、右の文脈からも明らかである。この記事に続けて「光源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは……」という述懐が置かれているところを見ると、物語に触発された様々な幻想もまた崩れさったようであるが、ともあれ、こうした孝標女の経験は、継母のそれとよく似ているのである。宮仕え経験もあり、歌を詠むことにも巧みな継母を、少女期の孝標女は人生の良き先達として仰ぎ見ていたに違いないが、結婚前後の事情について言えば、彼女の生き方は、あたかもその継母の人生をモデルとしてなぞっているようなものである。「継母なりし人は、宮仕へせしが下りしなれば、思ひしにあらぬことどもなどありて……」と書き記すとき、そこには結婚と宮仕えにまつわる孝標女自身の思いが、二重に投影されていたはずである。

さて、「姉継母」と作者の関係について、物語を軸とする交流について考えると言いながら、継母に関して専

ら宮仕えの問題に筆を費やしてしまったが、当該場面には直接的には物語とかかわる表現が見当たらないので、それも致し方ないことであつた。ただし、ここに載せられた継母の歌については、作者との間の物語を仲立ちにした交流を前提としない限り、正しい理解は得られないように思われるのである。

継母の歌は、「わが宿の梅の立枝や見えつらむ思ひのほかは君が来ませる」(『拾遺和歌集』巻第一、春)という平兼盛の歌を踏まえたものである。自分は行けないということができるだけ婉曲に伝えるために、巧みに古歌を利用した詠みぶりと、ひとまずは言えそうである。ただし、兼盛の歌は、『新日本古典文学大系』の脚注にも「家の主人よりも花見が目的の訪問を風刺して詠むのは、当時の類型的な発想^①」と言われる通りの内容である。継母が「思ひのほかの人も訪ふなり」と言うとき、それが単に花見が目的の来客を指しているのだとしたら、いかにも逃げ口上めいた、誠実味に欠ける詠みぶりということにもなる。もちろんそんな風に感じたとしたら、孝標女は傷ついたりしたはずであるし、この贈答が『日記』に記されることもなかっただろう。実際は、「あはれなることも書きて」という一節を見るだけでも、ふたりの心が通い合っていることは明らかであり、「思ひのほかの人」という言い方にしても、継母はそこに単なる花見客以上の意味を含ませており、孝標女の方でも、その辺の含みをすぐに察知できたというのが実情に近いのではあるまいか。そして、継母の歌が何かをほめかしているとするれば、それは結局、物語にまつわるほめかしとでも言うほかないと思われる。なぜなら、上総での四年間を共に過ごすことによつて、継母は、孝標女の最大の関心事が物語であることも、物語の作中人物と同一化しやすい彼女の性癖のことも、すべて十分に承知していたのであり、そのことを前提としてこの歌を解釈すれば、自分も行けないとしても、きっと誰か思いがけない人が現れますよ(物語における男君と女君の思いがけない出会いのように)といった含みが、当然読み取られるはずである。「思ひのほかの人も訪ふなり」という思わせぶりの言い回しは、決して無責任な遁辞で

はなく、孝標女の嗜好や性癖を計算した上でなされた、含蓄に富む表現だったのである。そして、互いに目配せし合っているような、こうした贈答歌の存在は、物語をめぐって、彼女等の間で日頃どのような会話が取り交わされていたかということについて、改めて考えるきっかけを与えてもくれるのである。

さて、物語や宮仕えにまつわる幻想を育むとともに、一方では孝標との離別という形で「うらめしげ」な「世の中」の現実を見せつけるなど、孝標女に対して、この継母は、様々な意味で教育者的な役割を果たしていたようであるが、そんな親密な関係も、彼女が家を離れてからは次第に薄れて行ったようである。もっともふたりの交際が完全に絶えたわけではないことは、姉の死に際して歌を取り交わしていることから明らかである。姉の死をめぐる一連の記事は、作者と物語の関係を考える上でもきわめて重要なものであるが、その点については節を改めて検討することとして、継母に関する最後の記事について、次に簡単に確認しておきたい。

継母なりし人、下りし国の名を宮にも言はるるに、異人通はしてのちも、なほその名を言はると聞きて、親の、「今はあいなきよし言ひにやらむ」とあるに、

朝倉や今は雲居に聞くものをなほ木のまろが名なのりをやする

この短い記事を最後に、以後、継母は作中から姿を消すことになる。孝標との離別後は、作者と継母の関係も次第に縁遠いものとなっていたとは想像されるが、右の歌は、継母との距離が決定的に遠いものとなってしまったことを告げているようである。代作とはいえ、彼女が代弁したのは継母の「上総」名乗りに対する父親の不快感だからである。上総での継母との思い出を誰よりも大切にしているはずの作者が、「上総」名乗りを責める歌を代作しなければならぬとは、随分と皮肉な事態ではあるが、そんなあやにくな事態を敢えて記すことによって、彼女は作中における継母との関係に、最も象徴的な形で終止符を打ってみせたのである。逆に言えば、そんな風にきちん

と終止符まで書き込んでおかなければならないほど、継母との関係は、孝標女にとって大きな意味があったということである。そのことは、作品構成の面からも裏付けることができる。右の記事にすぐに続けて、少女時代の総括とも言うべき「あらましごと」に関する記事が置かれているからである。上総以来、物語を核とする幻想の空間を共有していた「姉継母」のうち、姉はすでに亡く、継母との関係も決定的に遠いものとなってしまった。そのことを記した直後に、作者は少女時代を総括しようとするのである。あたかも「姉継母」との関係が失われたとき、少女時代も過ぎ去ってしまったという書きぶりであり、こうした記事構成の仕方からも、孝標女の少女時代にとって、ふたりの存在がどれほど重要な意味を持つものであったかが、改めて知られるのである。

さて、以上、継母に関する記事をめぐって検討してきたが、先ほども触れたように、なお考えるべき若干の問題は残されている。そうした点も含めて、次節では、姉に関する問題を中心に考察を進めてみたい。

三

上洛後の記事の中に姉の登場する場面を調べてみると、都合三ヶ所で、これは継母の場合と同じである。しかし、継母の場合、離別の場面を除けば和歌の贈答の相手方として登場するのみであり、それらの記事には取り立てて問題とするに足るほどの表面性すら存在しなかった（上洛早々の離別の当然の帰結ではあるが）。それに対し姉に関する記事は、姉妹の間の親密な雰囲気や表面性豊かに描き出しており、ふたりの会話の微妙な息遣いまで聞き取れそうなほどである。記事内容を見ても、姉妹は単に仲が好いというばかりではなく、物語に対する趣味、嗜好の点でも驚くほど似通っており、こと文学という側面に関する限り、この姉の存在は、孝標女の自己形成に最も深く本

質的な影響を及ぼしていると思われるのである。

以下、具体的に記事に即して見て行くことにするが、まず治安二年（一〇二二年、作者十五歳）の五月の記事に、姉の発言が長々と紹介されている。

「五月ばかり」のある夜、深夜まで物語を読んでいる作者の前に、どこからともなく一匹の猫が迷い込んで来る。それを見た姉の発案で（「あなかま、人に聞かすな。いとをかしげなる猫なり。飼はむ」）、姉妹はこの猫を飼うことにする。その後、病気の姉の夢の中にこの猫が現れて、「おのれは、侍従の大納言の御むすめの、かくなりたるなり。さるべき縁のいささかありて、この中の君（＝孝標女）のすずろにあはれと思ひ出でたまへば、ただしばしここにあるを……」と告げるのである。

この一連の記事から読み取られる事実を確認しておく、まず冒頭の「夜更くるまで物語を読み起きて起きのたれば」という一節が注目される。『源氏物語』耽読の場面などとともに、深更まで物語を読み耽る少女の姿が印象的に浮かび上がる。このような記事の繰り返しによって、物語を読む少女の姿は、少女期の作者のありようを最も典型的に特徴づけるひとつの像として、読者に強く印象づけられることになるのである。物語を読む少女など、存在自体としては別に珍しいものでもないが、この『日記』は、それを初めて文学的造形として具体的に作中に定着させたのである。そして、記録として残された限りでは歴史上最初の本格的『源氏物語』読者ということもあって、物語を読む少女としての孝標女の姿は、そのような少女像の典型例として、文学史上に特権的な位置を占めることにもなったのである。

さて、「夜更くるまで物語を読み起きて起きのたれば、来つらむ方も見えぬに、猫のいとなごう鳴いたるを、おどろきて見れば、いみじうをかしげなる猫あり」といった具合に、物語を読む少女の前に、まるで物語に誘われて迷い

込んだかのように一匹の猫が現れるわけだが、こうした登場の仕方といい、後に姉の夢の中で侍従の大納言の娘の生まれ変わりであると告げていることといい、この猫をめぐる記事は、全体に物語の夢幻性を感じさせる筆致となっている。そして、物語的雰囲気という点については、二ヶ月後の七月十三日の記事に描かれた姉妹の語り合いの場面もまた、同じような雰囲気に含まれているのである。さらに、このふたつの記事に関しては、もうひとつの共通の特徴として、姉妹の親密さが強調されているという点を指摘することもできる。七月の記事では、家人が皆寝静まった後の姉とふたりきりの語りであることが特筆されることによって、姉妹の親密さが強調されているし、猫の記事の方では、「人に聞かすな」という姉の言葉に、そのことは端的に示されている。すなわち、猫を飼うことによって姉妹は秘密を共有しているのであり、そのことがこの場面における親密な気分を強めているのである。場面全体を覆う物語的雰囲気と姉妹の親密さ——姉について語る記事は、常にそのような気分によって特徴づけられているのである。

なお、孝標女は『浜松中納言物語』の作者にも擬せられており、『浜松』が転生を骨子とする物語であることを考え合わせれば、転生に触れた姉の発言からは、さらに様々な読みが導かれそうであるが、今はその問題に深入りしないことにする。表層的には、姉の見た夢は、現実の猫の鳴き声が夢の中で変容を遂げたものであり、侍従の大納言の娘の死を悲しむ妹に対する彼女の思いやりが、そんな夢を生み出したと解釈できるだろう。ただし、所詮は夢の中のこととはいえ、死んだ娘の生まれ変わりの話を咄嗟に編み出した彼女の夢想の質については、やはり留意しておくなければならぬ。この夢は、『浜松中納言物語』の作者の見た夢だと言ってもおかしくないものであり、こうした記事の存在を手掛かりに、姉妹の精神的同質性について問い直すこともできそうである。しかもその種の同質性が認められるのは、何もこの場面に限らないのである。以下、夢の話ではなく現実の姉の言動の中に、

さらにこの問題を考える手掛かりを探ってみたい。

次に見るのは、治安二年、七月十三日の記事である。

その十三日の夜、月いみじくもなく明かきに、みな人も寝たる夜中ばかりに、縁に出でゐて、姉なる人、空をつくづくとながめて、「ただ今、ゆくへなく飛び失せなば、いかと思ふべき」と問ふに、なまおそろしと思へる気色を見て、異ごとに言ひなして笑ひなどして聞けば、かたはらなる所に、さきおふ車とまりて、「萩の葉、萩の葉」と呼ばすれど、答へざなり。呼びわづらひて、笛をいとをかくしく吹きすまして、過ぎぬなり。

笛の音のただ秋風と聞こゆるになど萩の葉のそよとこたへぬ
と言ひたれば、げにとて、

萩の葉のこたふるまでも吹き寄らでただに過ぎぬる笛の音ぞ憂き

かやうに明くるまでながめ明かいて、夜明けてぞみな人寝ぬる。

きわめて物語的な情景である。ただし、この場合、記事の前段と後段では「物語的」という言葉の意味するところが若干異なる。前半部分は、「ただ今、ゆくへなく飛び失せなば……」という姉の言葉が、「竹取物語」を意識しているように思われる点で「物語的」であり、後半部分は、語られている出来事そのものが、物語の一場面のように見えるのである。

まず前半部であるが、姉の言葉が「竹取物語」を意識したものであることは、十三夜の月を「つくづくとながめて」という状況からしても間違いないと思われるが、ではなぜ彼女はこんなことを口にしたのか、そこにはどのような思いがこめられていたのかという点になると、この程度の限られた叙述から明快な答えを導くのは困難である。姉の言葉が物語を踏まえた単なる戯言にすぎなかったのか、それともそこには何かしら深刻な思いがこめられてい

たのか、そんなことは今更確かめようもないことではあるが、ただ、少なくとも孝標女にとって、姉の言葉が単なる冗談でなかったことは、「なまおそろし」と怯える彼女の反応からも明らかである。この妹にとって、「ただ今、ゆくへなく飛び失せなば……」という姉の言葉には、ただの戯言とは思われない何かがあったのである。なぜ彼女にはそう感じられたのか。いったい姉の身には、この言葉を戯言と思わせない、どんな雰囲気や備わっていたのだろうか。姉がこんな言葉を口にしたくなつた現実的要因について、作中では何も言及されていないので、想像で語ることしかできないが、たとえば、猫の記事の中にも姉の病気のことが記されており、現実に彼女が夭折していることなども考え合わせて、病弱だった姉は、常に夭折の子感とともに生きていたとも考えられよう。また、この時期は、彼女が結婚という人生の転機を迎えて間もない頃だったに違いないので、そのことに起因する何らかの屈託があつたとも想像される。しかし、いずれにしても『日記』は、そうした事柄についてはいっさい触れようとしなないのである。作中に記された限りのことでは、後の姉の死をめぐる一連の記事の中で、彼女が『かばねたづぬる宮』を入手しようと努めていたことなど、この場面の夭折への思いとも響き合うよう興味深いものがある。『かばねたづぬる宮』は散佚物語であるが、『風葉和歌集』所載歌によって、大筋の内容は知られている。忍んで通つていた女が入水して果てた後、その亡骸を埋葬し菩提を弔おうと、男宮が女の「かばね」を捜し求める物語である。そんな物語を、彼女は「かならずもとめておこせよ」と、熱心に捜し求めたのである。「ただ今、ゆくへなく飛び失せなば……」という発言にしろ、『かばねたづぬる宮』にしろ、さらには猫の夢が侍従の大納言の娘の死にかかわっていたことなども含めて、作品に記された姉の言動には、常に死の影が射しているように見える。そして、このような姉の性癖は、夕顔や浮舟に心寄せする孝標女のそれと、まったく同質のものと言つてよさそうである。右の七月十三日の記事の直前には、孝標女が『長恨歌の物語』を捜し求めていることが記されているが、姉の『か

ばねたづぬる宮』と好一對をなす記事であり、悲劇への好尚において、ふたりが酷似した心性を示していることは明らかである。

さて、十三夜の記事の後半部であるが、ここでは「同じ心」のふたりによって、打てば響くといった趣の贈答が交わされている。取り立てて問題もなさそうな場面であるが、一点だけ留意しておきたいことがある。それは、ここに紹介されている贈答歌が、目の前の出来事に対する姉妹それぞれの批評という形を取りながら、同時にあたかも登場人物になり代わったかのようにして詠まれているという点である。見られる通り妹の歌とそれに対する姉の返しは、男女それぞれの立場に立って作られており、それはあたかもこの出来事の後、男と「萩の葉」の間で取り交わされた贈答だと言っても通用しそうなものである。そして、物語の一場面めいた出来事が身近にあれば、咄嗟に登場人物の気持ちを代弁する歌をひねってみせるといふ、こんな想像力の発動の仕方は、すぐれた物語享受者のそれには違いないとしても、ここでの姉妹の遣り取りを見れば、その想像力は、単なる享受の域を越えて、いつも物語創作へ向けて踏み出す用意が整っているようにさえ感じられるのである。本稿では物語作者としての孝標女を問題にするつもりはないが、彼女について、作家的想像力の形成過程を問題にするような場合には、この場面なども、考察の対象として慎重に読み解かれなければならないであろう。

以上、姉妹の親密な交流を描いたふたつの場面を見てきたが、最後に姉の死をめぐる記事について確認しておくことにする。

姉が亡くなったのは、治安四年（一〇二四年、作者十七歳）五月のことである。『日記』には、「その五月のうちに、姉なる人、子うみて亡くなりぬ」とある。ただし、ここでは姉の死の場面そのものよりも、遺された人々の中で交わされる贈答の方に注目してみたい。姉が『かばねたづぬる宮』を求めていたことは、先にも触れたが、

そのことが知られるのは、姉の死後、かつて姉に頼まれていた親戚が、「そのをりは、え見出でずなりにしを、今しも人のおこせたるがあはれに悲しきこと」と言つて、その物語を屈けてくれたことが記されているからである。『かばねたづぬる宮』などという表題の物語が、依頼主の死後になつて届けられるとは、余りにも皮肉な事態であるが、その悲しみを孝標女は、「うづもれぬかばねを何にたづねけむ昔の下には身こそなりけれ」という歌に託して、返り事としている。そして、この記事に続けて、姉の縁者による鎮魂歌めいた和歌の贈答が置かれている。次のような贈答である。

乳母なりし人、「今は何につけてか」など、泣く泣くもとありける所に帰りわたるに、

「ふるさどにかくこそ人は帰りけれあはれいかなる別れなりけむ

昔の形見には、いかでとなむ思ふ」など書きて、「硯の水の凍れば、皆とぢられてとどめつ」と言ひたるに、

かき流すあとはつららにとぢてけりなにを忘れぬ形見とか見む

と言ひやりたる返りことに、

慰さむるかたもなききの浜千鳥なにかうき世に跡もとどめむ

この乳母、墓はかどを見て、泣く泣く帰りたりし、

昇りけむ野辺は煙もなかりけむいづこをはかたとづねてか見し

これを聞きて、継母なりし人、

そこはかと知りてゆかねど先に立つなみだぞ道のしるべなりける

かばねたづぬる宮、おこせたりし人、

住みなれぬ野辺の笹原あとはかもなくいかにたづねわびけむ

これを見て、兄人は、その夜おくりに行きたりしかば、

見しままに燃えし煙は尽きにしをいかがたづねし野辺の笹原

この贈答のうち、前半の乳母と作者との遣り取りについては、その状況に格別の問題はない（語釈の次元では曖昧な部分もあるが）。「乳母なりし人」とは、もちろん姉の乳母のことであるから、姉の亡き後、家を去ろうとする乳母と、別れを悲しむ作者との贈答として自然に理解できる場面である。それに対して、「この乳母、墓所見て……」以下の贈答は、それが果たしてどのような状況で成立した贈答なのか、必ずしも分明ではないのである。「昇りけむ……」という作者の歌は、乳母が姉の墓所を見て泣く泣く帰ったことを承けて詠まれているので、これが贈答歌だとすれば、相手は乳母しか考えられないわけだが、彼女の返歌はない。では独詠歌かと言えば、なぜかそれを聞きつけた継母以下の人々の歌が存在するという次第である。ここで考えられるのは、「昇りけむ……」という歌が、単純な贈答歌でもなければ、もちろん独詠歌でもなく、初めから継母以下の人々の唱和を求めて作られた歌だったのではないかということである。『新潮日本古典集成』は、この場面について、次のような頭注を付している。

去りゆく乳母との哀切な贈答に続き、継母・「かばねたづぬる宮、おこせたりし人」・兄の詠歌が、「野辺」「煙」「はか」「笹原」「たづね」などを共通用語として唱和され、いわば交響乐的に鎮魂の調べが奏でられる趣。確かにこの場面には、そのような表現効果が認められるのであるが、この場面が家集的事であることを勘案しても、その効果は、『日記』執筆時の作者に意識されていたばかりではなく、「昇りけむ……」という歌を詠んだ十七歳の作者にも、すではっきりと自覚されていたのではないだろうか。すなわち、彼女は、「昇りけむ……」という自身を歌をきっかけとして、継母以下、姉と近しかった人々に、亡き姉をめぐる交響的唱和を求めたのである。そし

て、その際、「墓」を「たづね」というモチーフを、一連の唱和の核心に据えたのは、『かばねたづぬる宮』が姉の死後になって届けられたという不思議な偶然が、姉の人生の終幕を飾るにふさわしい、きわめて象徴的な出来事と思われたからに違いない。この記事以後、『日記』は姉についていっさい触れることをしませんが、『かばねたづぬる宮』という物語を発想の契機とする一連の唱和によって、姉に関する話題を締め括るという記事構成の仕方は、『日記』執筆時の作者にとって、十七歳当時の自分が姉の死に際して感じ取っていたことを、改めて確認するような作業だったに違いない。「昇りけむ……」という歌を詠み、継母や「かばねたづぬる宮、おこせたりし人」に唱和を求めた十七歳の作者には、自己の人生にとっての姉の存在の意味が、すではっきりと認識されていたのである。そして、執筆時の作者が姉について語りおさめようとしたときにも、物語『かばねたづぬる宮』に触発された一連の哀傷歌に鎮魂の思いを託しつつ結ぶことこそ、物語世界への良き導き手であった姉のためには、最もふさわしい終幕と思われたのである。『更級日記』の記事構成は、姉の人生が死後もなお物語とのかかわりを示したという事実の象徴性を際立たせるものとなっており、姉と物語のかかわりの深さを改めて確認しながら、少女時代に関する重要な話柄は閉じられるのである。

以上、物語世界への案内者としての継母と姉の意味をめぐって、考察を進めてきた。「孝標女と物語」という課題について議論を尽くそうとすれば、考えるべき問題は他にもあろうが、今は考察の範囲を孝標女の少女期に限ることとして、ひとまず筆を擱くことにする。

注

(1) 拙稿「『更級日記』の構造——家集的章段を中心に——」(『平安文学研究』昭和五四・六)、
「『更級日記』の多層的

構造をめぐって」(『中古文学』昭和五八・五)等参照。

(2) 引用は、秋山虔校注『更級日記』(新潮日本古典集成)に拠る。

(3) 秋山虔「更級日記についての断章——東海道上洛記をめぐって——」(『論集日記文学』所収、平成三)に、同趣旨の指摘がある。

(4) 滝澤貞夫「まま母考——『更級日記』の場合など——」(『中古文学』平成四・六)。

(5) 津本信博『更級日記の研究』(昭和五七年刊)。

(6) 孝標女が常に紫式部を意識していたことは、『更級日記』のありようから推して明らかである。とすれば、自分とほぼ同世代で(大式三位の方が八歳ほど年上)、同じ時代を生きた(『更級日記』の成立は大式三位の存命中のことと考えられる)「紫式部の娘」の存在が、気にならなかつたはずもなからう。彼女が少女時代に、「人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど後の御かけにかくるべきさま」と解釈されるような夢を見たことについては後にも触れるが、夢がかなわず「あはれに心憂」かつた孝標女と違い、後冷泉天皇の乳母として重んじられたのが、大式三位だったのである。

(7) 「『更級日記』の夢——作者の精神史の一側面——」(『日本文芸論稿』昭和五五・六)。

(8) 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』(平成二年刊)。

(9) この場面に関する精緻な考察として、木村正中『更級日記』における『源氏物語』の享受(『源氏物語』とその受容)所収、昭和五九・九)がある。この論においては、『源氏物語』蜻蛉巻で、薫が物語絵の画中人物の言動に自身の思いを託しつつ「萩の葉に露ふきむすぶ秋風もゆふべそわきて身にはしみける」という歌を詠む場面と、『更級日記』当該場面の類似が論究され、「『更級日記』の美景は、『源氏物語』の手法に触発された物語的場面形成を経て、はじめてその人生的意義を陸離たらしめているのである」と結論づけられている。